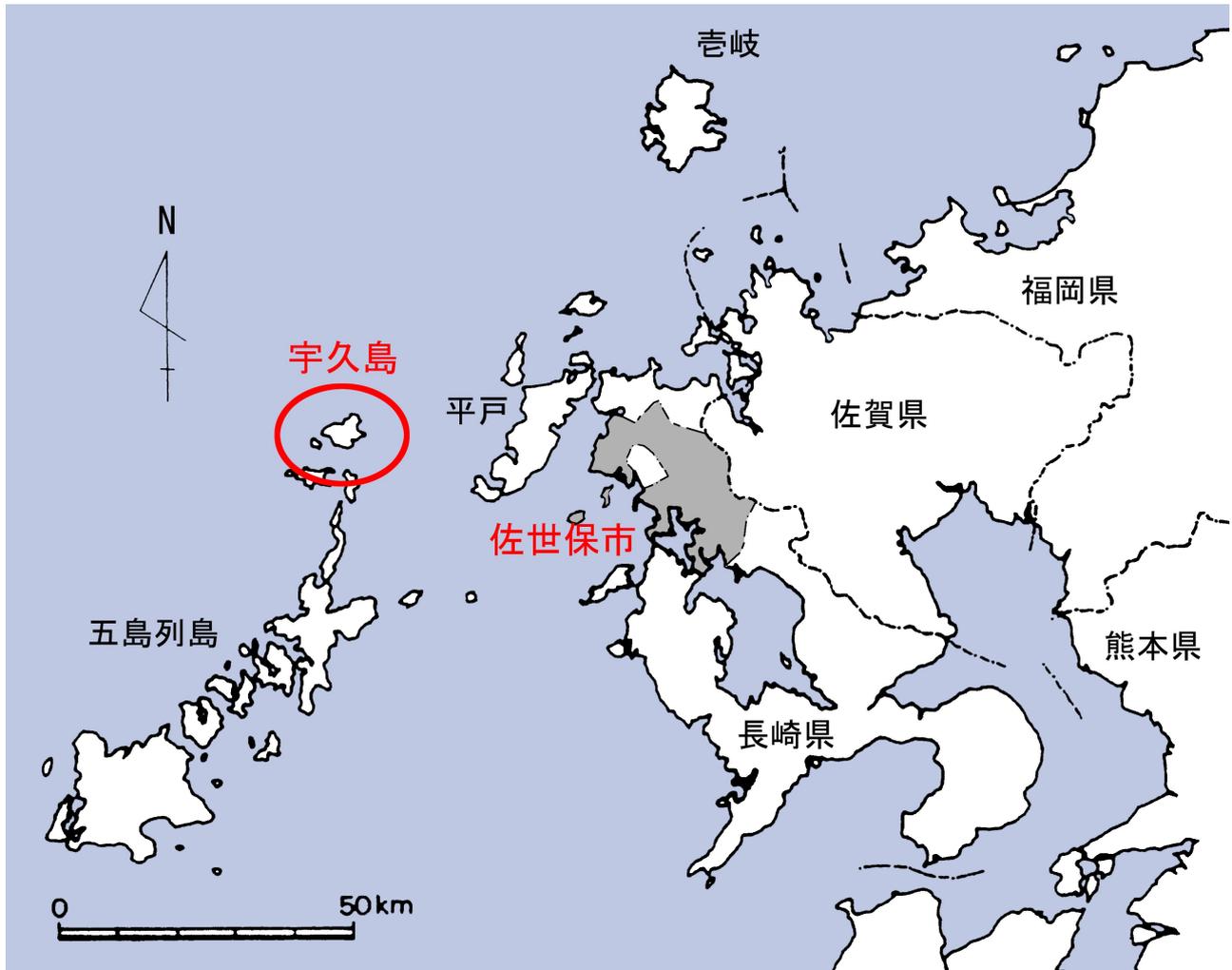


第16章

宇久島の歴史と文化財



宇久島の位置

この地域の小中学校

小学校: 宇久小学校、こうのうら神浦小学校

中学校: 宇久中学校

第16章 宇久島の歴史と文化財

五島列島最北端の島

宇久島を含む五島列島は日本本土の西、¹東シナ海に浮かぶ²島々から成り立っています。³白山火山帯に属していることから多くの火山があり、火山活動が島の成り立ちに大きく影響しています。

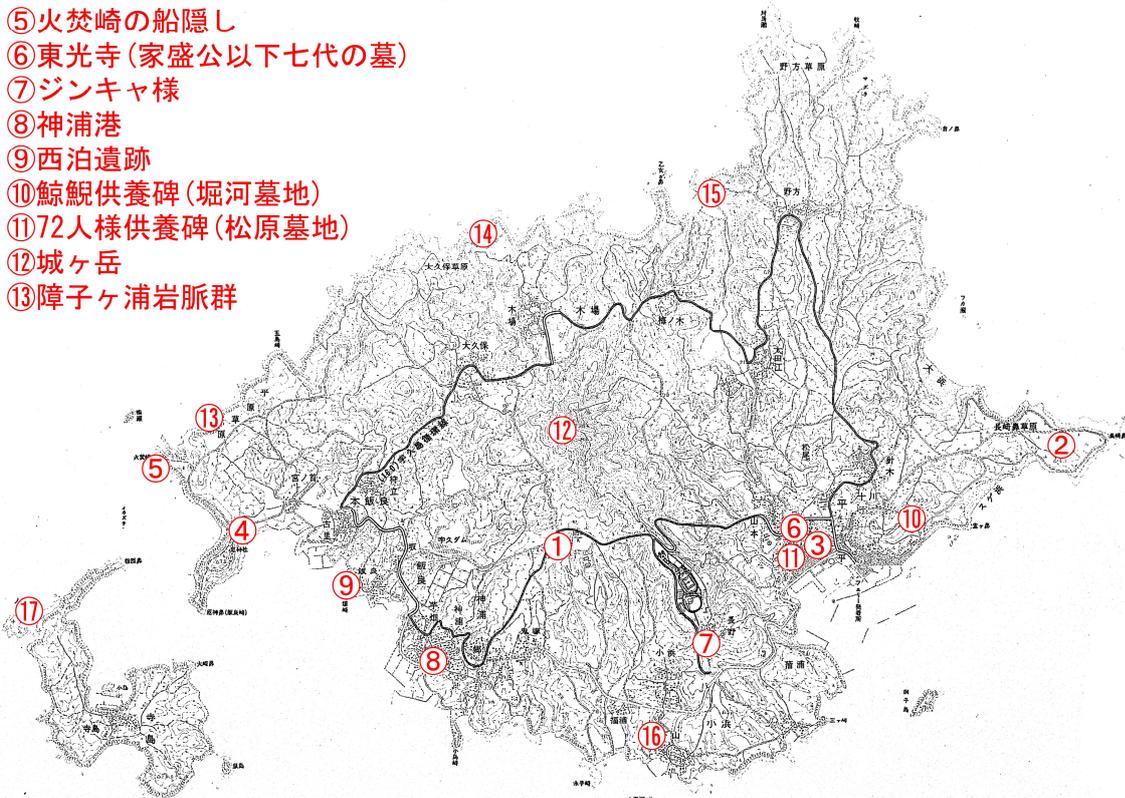
その五島列島の最も北に位置しているのが⁴宇久島です。佐世保港の西、約58キロメートルの海上にあり、東西8キロメートル、南北6キロメートルの約25平方キロメートルの大きさがあります。佐世保港とはフェリーと高速船で連絡しており、島ならではの文化と産業が根付いています。



宇久島航空写真

- 1 九州と中国大陸の間にある海。東中国海ともいう。
- 2 島の総数は141島。そのうち有人島は18島。最大の島は福江島で326.26平方キロメートル。
- 3 中部地方北西部から九州北部地方まで、帯状に分布する火山群の総称。雲仙普賢岳も入っている。
- 4 古くは「有救島」と書いた。南西には属島の寺島(東西1.5、南北2キロメートル、約1.4平方キロメートル)がある。

- | | |
|-----------------|-----------------|
| ①城ヶ岳平子遺跡 | ⑭木場海岸溶岩トンネル |
| ②長崎鼻遺跡群 | ⑮蘇鉄の巨樹(三浦神社) |
| ③松原遺跡 | ⑯下山のアコウ |
| ④宮ノ首遺跡 | ⑰寺島玉石甌穴(ポットホール) |
| ⑤火焚崎の船隠し | |
| ⑥東光寺(家盛公以下七代の墓) | |
| ⑦ジンキャ様 | |
| ⑧神浦港 | |
| ⑨西泊遺跡 | |
| ⑩鯨鯢供養碑(堀河墓地) | |
| ⑪72人様供養碑(松原墓地) | |
| ⑫城ヶ岳 | |
| ⑬障子ヶ浦岩脈群 | |



宇久島の地図

島は、⁵黒潮から分かれた対馬暖流に洗われているため比較的暖かく、アコウやソテツなどの⁶亜熱帯地域の植物が多く見られます。また、島の内陸部は城ヶ岳（標高259メートル）の噴火によってできた緩やかな地形が広がっていて、畑や水田に利用されています。この緩やかな地形は人が住みやすかったようで、島にはたくさんの遺跡が残されています。

対照的に海岸部には「⁷岩脈」や「⁸溶岩トンネル」など、火山活動によってできた荒々しい地形が見られます。

5 南から暖かい海水を運ぶ暖流。日本海流とも呼ぶ。微生物が少なく透明度が高いため青黒色に見える。そのため、黒潮と呼ぶ。

6 沖縄などの琉球、南西諸島などの気候。本土よりも暖かい。

7 岩の割れ目に溶岩が入り込んでそのまま冷え固まり、その後周囲の岩が浸食されて溶岩部分が露出したもの。

8 ゆっくりとした噴火が長時間続くと、地下に溶岩の通り道ができる。これを溶岩トンネルという。



うくしもやまのアカウ(市天然記念物)



じょうがたけ
城ヶ岳



そてつ きよじゅ けんてん けんきんぶつ
蘇鉄の巨樹(県天然記念物)



しょうじがうら がんみやくん
障子ヶ浦の岩脈群



まきば かいがん ようがんとんねる
木場海岸の溶岩トンネル

旧石器時代の宇久島

宇久島では、城ヶ岳平子遺跡をはじめとする後期旧石器時代(約30,000年前～約13,000年前)の遺跡が、15カ所も発見されています。この時代の人々は土器を持たず、⁹ナウマンゾウや¹⁰オオツノジカなどの大型動物を追って移動するという生活を送っていました。

- 9 明治時代に、このゾウの化石を調査したドイツ人地質学者のナウマンの名をとって命名された。氷河期の日本にいたが、現在では絶滅している。
- 10 角の広がりや2.5メートル、肩までの高さが2メートルもある大きなシカ。ナウマンゾウと同じく氷河期の日本にいたが、現在では絶滅している。



城ヶ岳平子遺跡

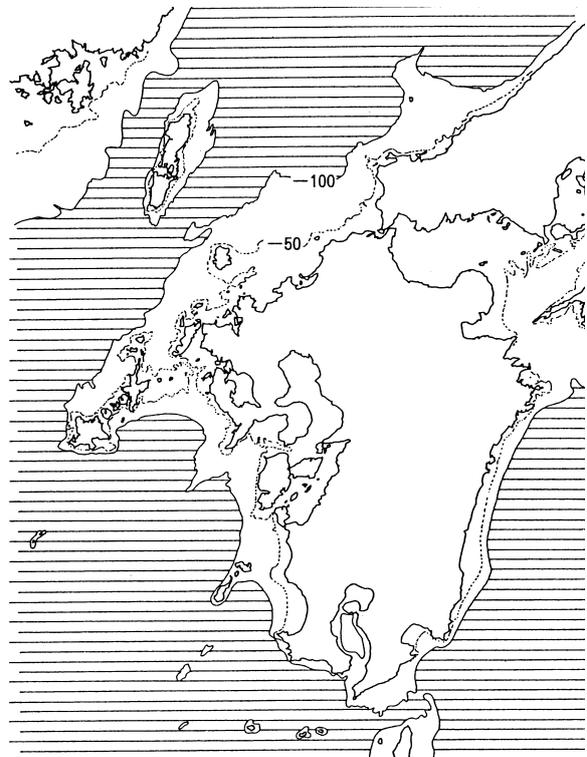


宇久島発見の旧石器

※宇久島資料館に展示中

この時代、地球は氷河期といって、平均気温が現在と比べて5度くらい低い寒い時代でした。そのため、南極や北極地方には、今よりもっとたくさん氷があり、内陸の山々にも氷河が発達していました。海水が分厚い氷となって堆積していたため、海面は現在より最大で90メートルも低くなっていました。

この頃の陸地の範囲はおおよそ右の図のようだったと考えられています。この図からわかるように、五島列島と日本本土は陸続きになっていたのです。そのため、人々は歩いて宇久島にやってきたのです。



氷河期(約20,000年前)の海岸線(推定)

※長崎県教育委員会刊『原始・古代の長崎県』より転載

郷土の人 ～宇久島の遺跡と瀬尾泰平～

郷土史家の瀬尾泰平氏は、50年以上も宇久島の遺跡を調べて島内を回り、現在知られている遺跡のほとんどを発見した。

なかでも城ヶ岳平子の旧石器遺跡は、日本考古学研究史に残る発見となっている。ここから発見された独特の形をした¹¹細石核が研究者たちの注目を集めたのだ。発見当時はこれが古いものか新しいものかよく分からなかったが、その後の研究により旧石器時代の最終末期のものと分かった。その後、大村市の野岳遺跡でも同じ細石核が見つかり、「野岳型細石核」と分類されている。

城ヶ岳平子遺跡の細石核は、瀬尾氏の収集品だけでも251点を数え、一つの遺跡から発見された細石核としては、泉福寺洞窟（第4章相浦谷参照）に次ぐ量を誇っている。（泉福寺洞窟は重文指定のみで357個、城ヶ岳平子遺跡では瀬尾氏の収集のほか、長崎県立美術館が行った発掘調査でも32点が出土しており、他の採集を加えると300点を超える。）

その他にも瀬尾氏は、神浦付近の西泊遺跡から12～16世紀の中国産陶磁器を多数発見している。時代幅が長く、膨大な量があることから、これは本土へ運ぶ途中で一時陸揚げした中継基地があったことを示している。この中国産陶磁器の取引による利益が、宇久島の領主だった宇久氏の収入源であったことは確実で、中世における宇久島の役割を明らかにするものである。



瀬尾泰平



西泊遺跡から発見された陶磁器

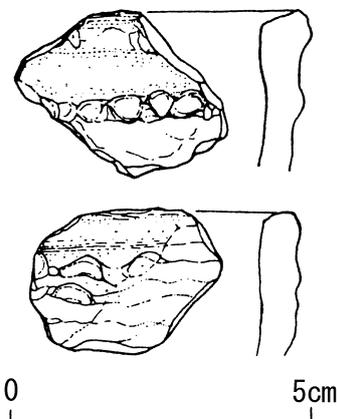
※瀬尾泰平氏所蔵

- 11 旧石器時代の終わりごろに出現した細石刃という組み合わせ石器を剥ぎ取るための石核。

宇久島の縄文文化

城ヶ岳平子遺跡からは発掘調査で約11,000年前頃の「隆起線文土器」と呼ばれる土器も発見されています。この土器は、泉福寺洞窟（第4章相浦谷参照）から発見された世界最古の「豆粒文土器」の次に現れるタイプの土器で、全国で約30カ所の遺跡から発見されています。

この土器は、同じ佐世保市の福井洞窟（第14章吉井参照）からも出土していることから、城ヶ岳平子遺跡に住んだ人々は、福井洞窟や泉福寺洞窟などに住んだ人々と何らかの交流があったのかもしれませんが。



城ヶ岳平子遺跡の隆起線文土器

※長崎県立美術館刊『城ヶ岳遺跡
—第一次調査概報—』より転載

そして、長崎鼻遺跡(市指定史跡)からは「¹²丸のみ形石斧」と呼ばれる珍しい石器が発見されています。斧の形をしているのですが、刃先が「丸のみ」のようにえぐれています。

削ったり、切ったりするより「えぐる」ことに適していることから、丸木舟を作る石器ではないかと考えられています。この石器は鹿児島県や南西諸島、沖縄でも発見されていることから、さらに南の島々から黒潮に乗って伝えられたのかもしれませんが。

有名な『椰子の実』の歌のように、日本のはるか南の文化や物が海流に運ばれ、流れ着く…。これも、宇久という島の文化的な特徴ではないでしょうか。

12 鹿児島県の梶ノ原遺跡で最初に見つかったため、「梶ノ原型石斧」ともいう。九州各地で発見が相次いでいる。



長崎鼻遺跡群遠望(市指定史跡)



丸のみ形石斧

※瀬尾泰平氏所蔵

コラム～黒潮が運んだもの～

小説家島崎藤村は、民俗学者柳田国男から、愛知県渥美半島の海岸に流れ着いた椰子の実に感動した話を聞き、「名も知らぬ 遠き島より流れ寄る 椰子の実ひとつ…」の歌詞で有名な『椰子の実』を作詞した。(作曲 大中寅二)その後、柳田国男は日本文化の起源の一部は、南方から黒潮に乗ってもたらされたという説を発表したが、流れ着いた椰子の実が、その説のヒントとなったことは間違いないだろう。



宇久島に流れ着いた椰子の実



平戸島から見た五島列島

※写真提供：平戸市商工観光課

縄文時代が始まる頃には、氷河期も終わってすでに宇久は島になっていました。そのため、隆起線文土器や丸のみ形石斧を伝えた人々は、船で渡ってきたと考えられます。本土から五島列島はよく見えますし、平戸島からは、最短で18キロメートルしか離れていません。

奈良時代には五島列島のことを「近嶋」(値嘉島)と呼んでいたほどですので、縄文時代の丸木舟でも天候さえ良ければ、島に渡ることはそれほど難しいことではなかったと考えられます。

宇久縄文人の生活

ここで、島の各地に残された遺跡から、宇久縄文人の生活の様子を復元してみましょう。

長崎鼻遺跡や、宮ノ首遺跡(市指定史跡)からはたくさんの貝殻やイルカの骨とともに、組み合わせ式の「石銛」が出土しています。島という環境ですから、漁労活動が盛んだったことが分かります。また、島の各地からは「矢じり」がたくさん見つかっています。漁労とともに狩猟も盛んだったようです。そして、それらの石器を作る材料となった黒曜石は本土に産出するものを多く使っており、また、土器も本土と同じタイプのものでたくさん見つかっています。これは本土に住む縄文人と交易を行っていたことを証明するものです。

このように、宇久縄文人は海と陸の両方から食料を得て生活し、丸木舟を作って本土と盛んに交易を行っていたのです。



←石銛(左)と
矢じり(右)
※宇久島資料館に
展示中
宮ノ首遺跡→
(市指定史跡)



縄文文化の終焉

約10,000年間も続いた縄文時代は、主に狩猟と採集の文化でした。自然から食糧を得るものだから、人口の増加とともに森林の伐採などの環境破壊が進むと、次第に資源(食糧)が少なくなり、生活は行き詰まってしまったと考えられています。事実、縄文時代に島に住んでいたシカやイノシシなどの哺乳類は狩りのために絶滅したと考えられています。

コラム～動物の絶滅～

地球の歴史は、見方によっては生物の絶滅の歴史でもある。数億年前に全世界で繁栄した三葉虫やアンモナイト、そして6,500万年前には恐竜が絶滅した。これらの絶滅は、地球環境(主に気候)の変化が大きく原因している。

ところが、約7,000年前に絶滅したゾウの仲間のマンモスは、人間が絶滅させたといわれている。事実、シベリアではマンモスの骨や牙で造った家があったくらい、大量に捕獲されている。狩りによって、種の保存が難しくなるほど数が減ることを「狩猟圧」という。宇久島からシカやイノシシがいなくなったのは、狩猟圧が原因であることは間違いないだろう。

地球の歴史では極めて短期間になる、この10,000年間で絶滅した動物は、主に人によるものであると言っている。最近では、新潟県佐渡島で最後のトキが死んで、日本固有のトキは絶滅してしまった。これは狩りで極端に数を減らしたところに、農薬や公害など、人間の活動が動物の住環境を脅かして追い打ちをかけた結果、起こったことである。

弥生時代の宇久島

自然から食料を得る縄文文化が行き詰まっていたと考えられる約2,500年前頃、中国大陸から米作りを中心とした¹³農耕が伝えられました。最初の米作りは佐賀県の唐津や福岡平野で始まり、そして急速に広がって行きます。弥生時代の幕開けです。宇久島には、その最も古い段階の弥生文化が入ってきました。平にある¹⁴宇久松原遺跡です。



発掘調査中の宇久松原遺跡



宇久松原遺跡出土品

※宇久島資料館所蔵

宇久松原遺跡は、長崎県の沿岸部に弥生文化が定着する以前、つまり、福岡平野に弥生文化が伝わった頃とほぼ同時に、宇久島にも弥生文化が伝わっていたことを示す重要な遺跡として長崎県の史跡に指定されています。

弥生時代は、海上交通が中国大陸と行き来できるほど発達していた時代ですので、福岡平野に住む弥生人が宇久島にやってくる、あるいは福岡平野に弥生文化を伝えた人たちが、同時に宇久島にも弥生文化を伝えていたのかもしれませんが。

13 最近の研究では、縄文時代晩期には稲作が行われていたことがわかっている。また、畑作などの農耕自体は縄文時代中期には既に行われていたとする説もある。

14 数度の発掘調査により、弥生時代の大規模な墓地があったことがわかっている。なお、遺跡から出土した遺物は、神島神社近くの「宇久島資料館」に収蔵、展示されている。

宇久松原遺跡の特徴のひとつに「支石墓」があります。これは地面に穴を掘り、直接あるいは石棺や甕棺で死者を葬り、そして幾つかの支え石の上に大きな石(上石)を乗せて墓とするものです。この「支石墓」という墓は、朝鮮半島から伝わったもので、日本では九州西北部にしか確認されています。

そして面白いことに、松原遺跡の支石墓には、縄文人の特徴を残す人々が葬られていたのです。つまり、この遺跡を残した人々は、縄文人の姿を保ちながら、弥生風の生活を送り、死者は朝鮮式の墓に葬っていたのです。



松原遺跡の支石墓(県指定史跡)

※写真は移設復元されたもの

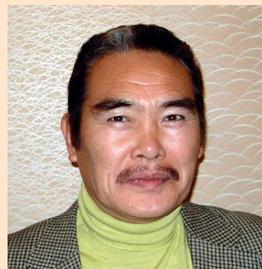
宇久島には、宇久松原遺跡をはじめとする弥生時代の遺跡が6カ所確認されていますが、そのほとんどが海岸近くにあります。これは、少しでも米作りに向けた低湿地を求めたためとも考えられますが、島内にはそのような低湿地は少なく、米作りに関係する遺物も発見されていません。恐らく宇久弥生人たちは、米作りなどの農耕よりも、縄文時代より続く伝統的な漁労活動によって生活を支え、さらに、その豊富な海産物の交易を盛んに行っていたと考えられます。このことが、人々が海沿いに集まった最も大きな理由ではないでしょうか。

そして、この海産物の交易を通して弥生文化や、朝鮮の文化を取り入れ、それまでの文化と融合させることによって、独自の文化を育てていたのです。

コラム～縄文人と弥生人～

1953年(昭和28)に始まった、山口県土井ヶ浜遺跡の調査で出土した弥生人の骨は、それまでの縄文人の骨格とは大きく異なるものだった。身長が低く、丸顔で彫りの深い縄文人に対し、土井ヶ浜人は身長が高く、面長で彫りが浅かった。このことから、土井ヶ浜人は中国大陸から弥生文化を日本に伝えた「渡来人」だったと考えられている。なお、縄文人と弥生人の特徴をよく表した現代人として、俳優で考古学者の苅谷俊介(1946～)と作家の樋口一葉(1872～96)があげられる。

また、高島の宮ノ本遺跡(第5章高島参照)の墓地に埋葬されていた弥生人は、骨格は縄文人なのだが、縄文の文化は完全に失っていた。縄文人が弥生化した例である。



縄文人の復顔像(左)と苅谷俊介(右)

※写真提供:(左)土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム

(右)株式会社 土舞台



弥生人の復顔像(左)と樋口一葉(右)

※写真提供:(左)土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム

(右)東京都台東区立一葉記念館

俳優の苅谷俊介氏は、俳優石原裕次郎の新居建設現場の発掘調査に遭遇したことから、考古学の研究に目覚めた。現在でも俳優活動の傍ら考古学に関する多くの本を執筆し、発掘調査にも積極的に参加している。

古文書のなかの宇久島

弥生時代に続く、古墳時代の宇久島の様子については、古墳や大きな遺跡が見つからないため、詳しいことは解っていません。

奈良時代になると、『¹⁵古事記』や『¹⁶肥前國風土記』といった古文書に宇久島を含む五島列島の記述が現れます。

このうち『肥前國風土記』には、平戸島からすぐ近くに見えることから、「近嶋」(値嘉嶋)と呼んだことや、「17土蜘蛛」と呼ばれる大和政権に従わない豪族たちが住んでいたこと、そして、「土蜘蛛」たちが海産物を献上して天皇の赦しを得たことなどが書かれています。また、平安時代に書かれた『18延喜式』という古文書にも鮑や海鼠の加工品を税として納めたことが記録されています。

現在でも、宇久島を含む五島列島近海は海産物が豊富で、商品として本土へ出荷されています。これは、古代から続く地域の伝統でもあったのです。

- 15 現存する日本最古の歴史書。712年(和銅5)に元明天皇の命により、稗田阿礼が暗誦していた帝紀(天皇の系譜)・旧辞(古い伝承)を太安万侶が書きとめ、献上したものです。
- 16 713年(和銅6)に全ての国に編纂が命じられた、諸国の風土や文化、伝承などを記録した書物『風土記』のうち、現在の長崎、佐賀地方を記録したものです。
- 17 東北の蝦夷、九州の熊襲のように、当時の早岐や五島などにいた豪族の総称。
- 18 律(刑法)、令(民法)を施行するための、細かい具体的規定。醍醐天皇の命により927年(延長7)に制定された。

遣唐使と宇久島

奈良時代から平安時代にかけて、日本は中国の制度や文化を学ぶため、「19遣唐使」と呼ばれる使節団を派遣しています。遣唐使は630年～894年(寛平6)の間に20回計画されましたが、そのうち、第17次遣唐使船が宇久島に寄港したという記録があります。

この第17次遣唐使船には、20円仁(滋覚大師)という高僧が乗っており、宇久島(有救島)で航海に適した風を待って出航したと記録しています。



遣唐使船寄港の候補地 神浦港

遣唐使船が宇久島のどの港に入港していたのかは分かりませんが、4隻もの船が同時に入るほどの港ですから、その港とは平や福浦、神浦ではないかと考えられます。

- 19 唐(中国)の文化や制度の習得の他にも、海外情勢や仏教の経典等の収集も目的だった。
- 20 天台宗の高僧。最後の遣唐使として唐に留学し、日本初の本格的旅行記『入唐求法巡礼行記』を記した。

コラム～長野の「ジンキャ様」～

藤原広嗣という人物がいた。広嗣は時の天皇、聖武天皇の後、光明皇后の甥に当たる人物で、当時勢力の衰えていた藤原氏の再興を目指していたが、藤原氏の再興を嫌った当時の政権により、大宰府に左遷されてしまった。

これを不満に思った広嗣は、中央政府の失政を批判する文書を政府に送り、次いで740年(天平12)に反乱を起こした。奈良時代最大の内乱「藤原広嗣の乱」である。しかし、豊後板櫃川での戦いに敗れ、反乱はわずか2ヵ月で鎮圧されてしまった。広嗣自身は耽羅島(済州島)に逃げようとしたが失敗し、値嘉島長野村に潜んでいたところを捕らえられ、唐津の鏡山付近で処刑されてしまった。

広嗣が捕らえられた「値嘉島長野村」がどこであるかについては、諸説あり定かではないが、宇久町小浜郷長野がその候補地のひとつとされている。

長野地区には、地元の人たちから「ジンキヤ様」と呼ばれている古い墓がある。平家の落人の墓であるとか、偉い人物の墓であるとか伝えられ、災害や病気は「ジンキヤ様」の祟りと恐れる。この「ジンキヤ様」とは、「臣下様」がなまったものとする説もある。



ジンキヤ様

ひょっとすると、この「ジンキヤ様」は、広嗣逮捕時に抵抗して殺された広嗣の家来たちを祭った墓ではないだろうか。島の人たちはこの事件に驚き、処刑された広嗣が、怨霊となって都に災いをもたらしたことを伝え聞き、家来たちの墓を恐れ、敬うようになったのではないだろうか。そして、現在でも長野地区の人たちによる供養が続けられている。

松浦党と家盛

平安時代の終わり頃から、長崎県北部から佐賀県唐津地方には「松浦党」と呼ばれる武士団が現れ、地域ごとに土地を支配していました。宇久島は、松浦党の中心的存在だった宗家松浦氏の第2代直の四男遊が相続を受けた所領の一つとして古文書に現れています。そして、遊の子、守が「宇久」を名乗ったといわれています。

宇久氏など松浦党の武士団は、平安時代の終わりを告げる源平合戦では、平家に味方しています。これは、松浦党と平家が、もともと結びつきが強かったためです。

結果として平家は滅び、源頼朝が鎌倉幕府を開きました。このとき松浦党は罪を問われずに、鎌倉幕府の家来である御家人になっています。しかし、一方では海賊行為や密貿易を行うなど、独立性が高い武士団だったようです。

その御家人の一人として現れるのが「家盛」です。この家盛の出身については、松浦党の宇久氏から引き続くものであるとする説、源氏系統の武田次郎信弘説、そして壇ノ浦で滅亡した平家一門の平家盛とするなど、さまざまな説があります。

コラム～平家の落人伝説～

「壇ノ浦における平家の滅亡を知った家盛は、西に下ることを決意し、わずかな家来と共に平戸を経て宇久島に上陸した。漁に来ていた島の海士たちは、一行を舞鶴の紋のついた木碗でもてなしたという。そして、島の土豪から領主になることを請われ、山本に館を築いて移り住み、名を宇久次郎有と改めた…。」



家盛上陸の伝説の地「船隠し」

これが、宇久島に伝わる「家盛」下向の伝説であり、宇久島に住む人ならば一度は聞いたことのある伝説であろう。この「家盛」が、平家の落人であったかどうかについては否定的な説が強いが、もし平家一門の人間であれば、平清盛の弟ということになる。

全国各地に、このような平家の落人が住み着いたとする伝説地がある。平安時代末の政治を実質的に握っていた平家が、源氏から滅ぼされた一大事件であり、そのため平家一門はもとより、多くの関係者までも京都から排除された。

それらの人たちが、新天地を求めて全国各地に散らばり、伝説地を残したとしても不思議ではない。「ひえつき節」で有名な宮崎県椎葉村は、平家の残党を討伐に来た那須大八郎と、落人の娘との悲恋の伝説地である。佐世保市内にも、相浦の三年ヶ浦や吉井の内裏山、草ノ尾などに平家の落人伝説が伝えられている。

念仏踊り「クインココ」

福江島に盆行事として伝わる「チャンココ」は、長崎県の無形民俗文化財に指定されている古い念仏踊りです。福江藩の始祖であり、宇久島の領主であった宇久家盛が「文治3年(1187)念仏踊りを見た」と記録しているように、800年以上も続いている伝統行事です。



念仏踊り「クインココ」

宇久島にも良く似た行事「クインココ」が各地に伝承されており、佐世保市の無形民俗文化財に指定されています。福江島に伝わる「チャンココ」は、宇久島から伝えられたといわれています。

詳しくは分かりませんが、クイン(チャン)は鈺の音、ココは太鼓の音で、これが名称の起こりではないかと考えられています。

宇久氏の福江島進出

鎌倉幕府の御家人となった宇久氏第5代の競は、1281年(弘安4)に起きた弘安の役(元寇)では、伊万里湾周辺の海でモンゴル軍と戦っています。また、第6代の実は、鎌倉幕府が滅亡して室町幕府が開かれた直後の1336年(建武3)に、幕府に従わない筑前の菊地氏を討つために九州に下った足利尊氏軍に従って菊地軍と戦っています。このように宇久氏は宇久島を拠点としながら、常に世の中の動きに乗り遅れることなく、活躍していたことがわかります。

そして第7代の寛は、1383年(永徳3)に本拠地を福江島に移しました。これは、宇久氏が五島列島の統一を目指して、より平地の多い福江島を本拠地を選んだためといわれています。

1526年(大永6)、第17代盛定の時代に五島列島の統一に成功した宇久氏は、豊臣秀吉が行った²¹朝鮮出兵(文禄・慶長の役)にも参加し、その際に第20代純玄が宇久姓を五島姓に改めています。以後、宇久氏は五島氏として、江戸時代が終わるまで福江藩主となり、宇久島も福江藩の一部となったのです。

福江藩は1664年(寛文4)に、幼い藩主の後見役として功績のあった藩主の叔父の独立を認め、富江藩が誕生しました。宇久島のうち神浦、小浜、飯良の3ヵ村が富江領となり、神浦に代官所が置かれました。



神浦代官所跡(市指定史跡)

21 天下統一を果たした豊臣秀吉が、明国(中国)を征服しようと朝鮮半島に出兵した事件。1592年(文禄元)、1597年(慶長2)の2度行われた。出兵した諸大名は陶工など多数の技術者を連れ帰った。朝鮮では壬申・丁酉の倭乱と呼ぶ。

宇久島と鯨

江戸時代、五島近海では捕鯨が盛んに行われました。対馬海峡や壱岐水道が鯨の通り道となっていたので、壱岐、対馬、平戸とならんで、五島にも多くの²²鯨組(捕鯨専門の漁師集団)がありました。江戸時代に本格化する捕鯨は、紀伊半島に鯨の突取漁(銚などで突き刺して鯨を捕る方法)を行う「突組」が組織されたのが始まりといわれています。そして、1616年(元和2)より数回、紀州(和歌山県)の突組が平戸周辺に来て技術を伝えました。



堀河墓地にある²³鯨鯨供養碑

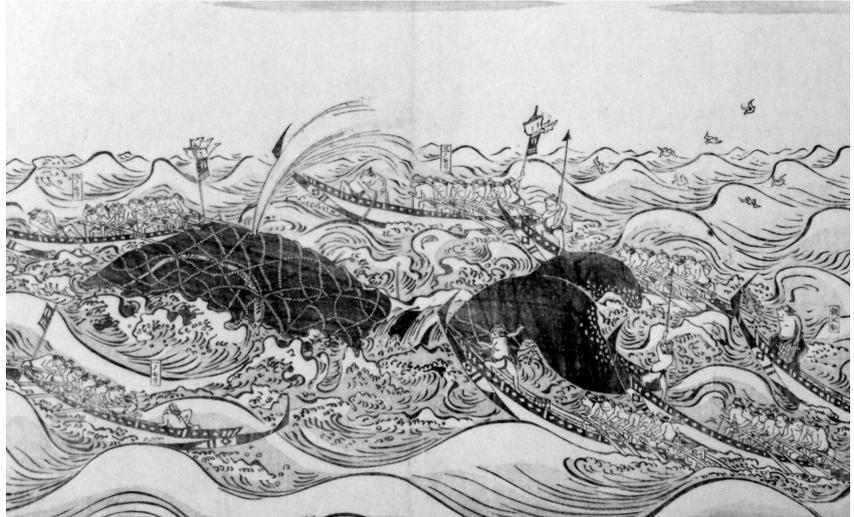
そのうちに地元でも、鯨組を作って捕鯨を行うようになり、1600年代後半の最盛期には、長崎県や佐賀県唐津地方に73組もの鯨組がありました。そのうち宇久島には芋畠(飯良郷芋畑)、下山(小浜郷下山)、八幡(本飯良郷宮ノ首)、コモノ浦(小浜郷蒲浦)、神嶋(平郷川端)の5組がありました。

これらの鯨組は江戸時代を通して盛んに捕鯨を行い、特に捕鯨が盛んだった生月島では、1725年(享保10)から1873年(明治6)までの149年間に、合計21,790頭もの鯨を捕獲しています。

22 銚での突取漁を行う「突組」、銚と網を使う「網組」など、漁の方法によって名称に違いがあるが、総称して「鯨組」と呼ぶ。

23 「鯨」はオスの鯨、「鯨」はメスの鯨のこと。この供養碑は浅井組という鯨組のもの。

鯨組は、鯨を網で囲う「双海船」(網船)と、鉾を持った突き手が乗る「勢小船」、鯨を浜へ運ぶ「持双船」など、船の総数30隻、人数は500人にもなる大規模なものです。捕鯨はこのように大変な資金と、労力がないとできないことでしたが、その利益は「鯨1頭で七浦が賑わう」といわれたほど大きなものだったのです。



捕鯨の様子

※資料提供：平戸市生月町博物館島の館

日本近海での捕鯨は、明治時代の初め頃まで続けられましたが、その後は捕鯨の舞台は南氷洋などに移ってしまい、近海での伝統的な捕鯨は行われなくなっていました。

鯨は、食料としての肉や油はもとより、歯、ヒゲ、骨までも余すところなく利用できることから、日本では縄文時代から鯨を重要な資源として活用してきました。捕鯨は縄文時代から続く、日本の伝統文化でもあったのですが、無秩序な濫獲のために鯨の数が激減してしまい、現在では、生態調査目的以外での捕鯨は禁止されています。

昔ばなし～鯨親子の寺参り～

鯨がだんだん少なくなっていた頃、宇久島で代々鯨組の網元を務めてきた山田紋九郎は、ある夜、不思議な夢を見ました。夢の中に鯨の親子が現れ、紋九郎に話しかけてきたのです。

鯨の親子は、「明日、玉ノ浦の大宝寺までお参りにいくので、どうか捕らないでください。」と、紋九郎に頼みました。

次の日の朝、驚いたことに本当に親子鯨が宇久島沖に現れたのです。昨夜の夢を思い出した紋九郎は、鯨組に漁に出ないように言いました。

ところが、鯨が年々少なくなっていたので、鯨組は紋九郎が止めるのも聞かずに船を出してしまったのです。



イラスト：末寺十郎

そして、鯨を取り囲み、捕りにかかったところ、急に暗雲がたちこめ、海は大荒れとなり、たくさんの方が溺れ死んでしまったそうです。

この話のモデルとなった遭難事件は、1716年（正徳6）1月22日に起こっており、72人が遭難死する大惨事となったと伝えられている。平地区にある松原墓地には山田紋九郎が建てた供養碑が残り、堀河墓地などにも供養碑がある。

また福岡市西区の西照寺にも、同日に9人が宇久島で遭難して亡くなったという旨の過去帳があり、出稼ぎに来ていた人もいたことが分かる。



松原墓地にある供養碑（右端）

このときの遭難事件は、鯨親子の寺参りの話となり、宇久島だけではなく、西日本の各地にも似たような話として伝わっている。それは、福岡の西照寺のように出稼ぎに来ていた人が地元を持ちかえたためだろう。なお、この時の遭難は、春一番といわれる台風なみに発達した低気圧に原因するものと考えられる。

コラム～宇久にもあった石橋～

宇久高校北側にある山本神社（別名妙見様）の参道が、江端川を渡るところに宇久島で唯一の石橋がある。アーチの長さ3.4メートルの自然石を用いた素朴な石橋で、1884年（明治17）に、地元の山本地区に住んでいた石工の鳥山伊勢蔵が架けたものである。



妙見様石橋

2006年（平成18）に存在が明らかになり、佐世保市で46番目の石橋になった。佐世保市は、石材が豊富であることから、古くから土木工事などへの石材の利用が盛んであった。そのためか、石橋も数多く架けられており、2013年（平成25）現在で66基の石橋が確認されている。ただし、合併地区などでは調査が進んでいない地区もあり、今後新たな石橋が発見される可能性もある。

このうち、吉井地区の「佐々川吉井の石橋群（8橋）」と「樋口橋」、世知原地区の「佐々川世知原の石橋群（17橋）」、小佐々地区の「西川内橋」、鹿町地区の「中野橋」の合計28橋が佐世保市の文化財に指定されている。

ち い き ね ん び ょ う
 地域の年表

時 代	出 来 事
旧石器時代	約20,000年前 蒙古野馬が住み、ナイフ形石器をもつ人たちがいた。 約15,000年前 城ヶ岳平子遺跡で狩りが行われていた。
縄文時代	
草創期	約12,000年前 城ヶ岳平子遺跡で最古級の土器「隆起線文土器」をもつ人たちが暮らしていた。 長崎鼻遺跡に丸のみ形石斧を使う人たちがいた。
前期	約7,000年前 宮ノ首遺跡が成立して貝塚ができる。以後、古墳時代まで人が暮らす。
弥生時代	約2,500年前 松原遺跡に人が住み、支石墓群が造られた。
古墳時代	約1,500年前 長崎鼻遺跡、山本遺跡など9カ所の遺跡がある。
平安時代	
1186年(文治2)	家盛が宇久に下向して領主になる。(伝)
鎌倉時代	
1281年(弘安4)	宇久競、蒙古襲来(元寇)に際し出兵する。
室町時代	
1336年(延元元)	足利尊氏軍に加わり、筑後で菊地氏と戦う。
1383年(弘和3)	宇久氏、本拠地を福江島の岐宿に移す。
1455年(康正元)	宇久勝、朝鮮と歳遣船貿易の約条を結ぶ。
戦国時代	
1587年(天正15)	宇久純玄、豊臣秀吉の九州平定に出兵して領地の安堵を受ける。
江戸時代	
1655年(明暦元)	福江藩から富江藩が分かれ、神浦などが本藩から分けられる。
1680年(延宝8)	この頃、山田茂兵衛が網とり捕鯨を始めた。
1813年(文化3)	日本地図作成のため伊能忠敬が来島し、測量を行った。
近代	
1874年(明治7)	平・本良(飯良)・神浦小学校開校。
1889年(明治22)	戸長制を廃して平村・神浦村が発足する。
1920年(大正9)	第1回国勢調査で宇久島は戸数1,660戸、人口11,678人。
現代	
1955年(昭和30)	平村と神浦村が合併して宇久町となる。
2006年(平成18)	佐世保市と合併する。